第４１７号　5月号　２０１９.5.２０

岐阜県 商店街だより

発行元：岐阜県商店街振興組合連合会　岐阜市薮田南 5-14-53　ＴＥＬ：058-277-1107

歴史あるビルの再生 ヒラクビル、オープン

◆多治見まちづくり株式会社

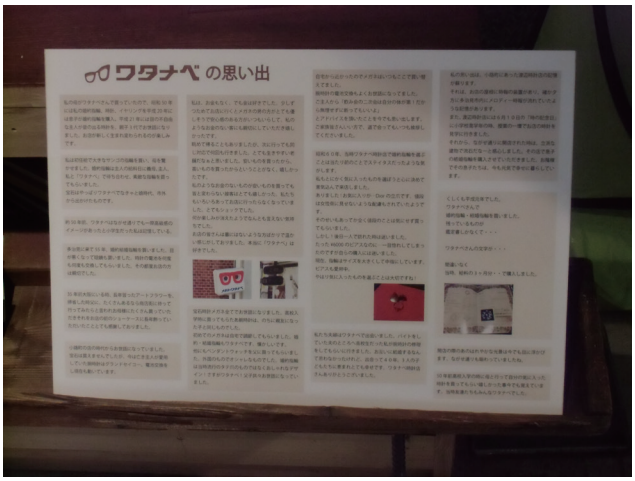
３月２４日、多治見市ながせ商店街のワタナベビルが「ヒラクビル」として再オープンしました。１階には地元の東文堂書店さんが運営する「ひらく本屋」と、多治見まちづくり株式会社（以下「まちづくり会社」）が運営する「喫茶わに」が、２階にはキッチン付きレンタルルームと４部屋のシェアオフィスが設けられています。

■閉店から再開まで

ワタナベビルでは１９７５年から時計・宝石・メガネのワタナベさんが営業していました。シンボルマークは店頭の世界時計です。多治見、香港、ローマ、ニューヨーク、ハワイの現在時刻をデジタル方式で表示する時計は、地元の方にとって親しみ深いものになっていたといいます。２０１３年、ワタナベさんが閉店した後は所有者が別の方にかわり、店舗はシャッターで閉ざされました。

まちづくり会社では、この状況を憂慮しました。ワタナベビルの両隣も向かいも空き店舗や駐車場になっており、商店街が東と西とに分断される形になっていたからです。この状況を打開するため、２０１７年、ビルの再生プロジェクトを開始しました。ビルの所有者やながせ商店街の商店主、地元の方々の協力を得て、ビル内部を片づけたり、近隣駐車場の駐車料金を２時間無料にしてもらったりしました。

ビルの再生に当たっては、ワタナベさんが営業していたころの面影を残すようにしました。店内に残されていたメガネをつなぎ合わせてシャンデリアを作ったり、２階の赤じゅうたんはそのまま再利用したり、カバーがほころんでいたソファーはパッチワークで繕ったり、などなど。地元の人ならば、足を踏み入れるだけで懐かしい気持ちになる工夫がされています。



▲店内に掲出している「ワタナベの思い出」

更に、書店に設置する本棚を製作するワークショップも開催しました。完成するまでの時間や仕上がりの出来を考えた場合、専門の業者に依頼したほうが効率は良いといいます。それでも敢えてワークショップで製作したのは、地元の市民にも参加してもらうことによって、営業を再開するビルに愛着を持ってもらうことを狙ったそうです。

▲ワークショップで製作した本棚

ワタナベさんの閉店から６年後、ビルの再生に着手してから２年後、ビル名をヒラクビルと改め、再び店頭の世界時計が動き始めました。「ヒラク」には、訪れた人が自身の扉を開いてもらいたい、という希望が込められています。

▲再び動き始めた世界時計

■ビルの再生を通して商店街を活性化

書店の誘致は、再生プロジェクトの初期には決まっていました。ビルの床面積を考えた場合、細かく分割してそれぞれを賃貸する方法もありましたが、オペレーション面で難がありました。それより、ビルの面積を生かすことができ、なおかつ新しい可能性を持つ業種として書店が挙げられました。

一方、「ひらく本屋」を運営する東文堂書店さんも、従来の取次会社（問屋）任せのラインナップではなく、独自のコンセプトを開きたいという考えを持っていました。両者の思わくが合致し、「本とともに過ごし、未来をひらく本屋」が生まれました。今後はながせ商店街の各店舗にも本棚を置き、各店舗に合った本を置くことも考えているといいます。

ひらく本屋と同じフロアに開店した「喫茶わに」については、疑問を持っていました。なぜなら近隣に同じくまちづくり会社が運営する別のカフェがあったからです。来店客がバッティングするなどのデメリットはないのだろうか。まちづくり会社の小口さんにこの疑問をぶつけました。

「もちろん、当社の運営する別のカフェにとって競合になります。しかし、それはながせ商店街に立地するカフェ・喫茶店にとっても同じことです」
「競合することは悪いことではありません。競争相手がいることによって、各店舗が工夫を凝らし、面白い店が増えると考えるからです」
「面白い店が増えれば、来街者も増えます。**個々の店舗で勝負するのではなく、街で勝負するのです**」

２階のキッチン付きレンタルルームの売りは、菓子製造・飲食店営業について保健所の許可を取っていることです。このスペースを利用することにより、お菓子作りを趣味にしている方がイベントで販売するお菓子を作ったり、パーティーを開いたりすることができます。

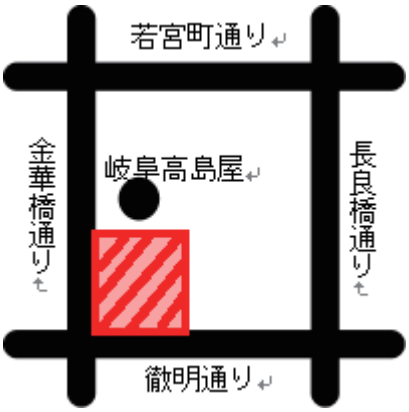
シェアオフィスは４部屋中３部屋がすでに入居しており、残り１部屋になっていました（４月１２日取材時）。業種については特に限定していませんが、条件として「街でいっしょにやってくれる人」を求めているそうです。

現在、どこの商店街でも空き店舗・空きビルが増えてきています。ワタナベビルの再生は、「街にビルをどう生かすか」を考える１つのヒントになります。

柳ケ瀬の未来に向かって
高島屋南地区再開発事業の工事着工

◆高島屋南市街地再開発組合

今年３月、「高島屋南地区第一種市街地再開発事業」は工事を着工しました。岐阜市の中心商店街、柳ケ瀬の西南ブロック約９０００㎡を再開発し、地上３５階、地下１階のビルを建設する計画です。１９８８年、岐阜県商店街振興組合連合会による活性化に向けた提案がなされて以来、約３０年かけて実現しました。



▲再開発地区（斜線枠）

■再開発事業の経緯

かつての柳ケ瀬は「人が肩をぶつけながら歩く」といわれるほどの活況でした。当時を知る人によると、関や多治見の県内にとどまらず、県外の一宮や名古屋からもお客さまが来ていました。しかし、１９７０年代から徐々に活気にかげりが見え始め、高島屋南地区でも再開発が議論されるようになりました。

とはいえ、すぐに議論が進んだわけではありません。２０００年にまちづくり協議会を、０２年に再開発準備組合を設立し、再開発のプランを何とおりも提案しましたが、権利者の賛同は広がりませんでした。高島屋南市街地再開発組合（TMK）の田宮理事長によると、「地元有志による井戸端会議みたいなもの」として顧みられなかった面があった、といいます。

再開発に対する賛同が広がったのは、２０１４年の TMK 設立からでした。市街地再開発組合を設立するには、都道府県の認可が必要です。岐阜県からの認可を得たことによって、田宮理事長をはじめとする中心メンバーの「本気度」が権利者にも伝わったのです。以後、５年の議論を経て、高島屋南地区のほとんどの権利者から賛同を得ることができました。

▲高島屋南地区の現在（５月２日撮影）

一見、時間がかかっているのは、田宮理事長をはじめとする中心メンバーが「権利者の意向をできるかぎり配慮する」という基本方針を堅持したためです。田宮理事長は言います。

「商店街の活性化を目的にした事業で、権利者や商店主の意向を無視しては本末転倒です」

「一時移転先の店舗が完成するまで従来店舗で営業するので、取り壊しを待ってほしいという商店主の要望がありました。もちろん、応えました」

■ビル完成後の課題

計画しているビルは、１～２階が商業施設、３～４階が公益的施設、５階以上が分譲住宅になる予定です。高島屋南地区で営業していた商店のうち、ビルの商業施設に入ることが決まっ

ているのは５～６店舗だそうです。「後継者が不在で継続できない」、「この機会に閉店したい」という商店主が多かったといいます。この逆境を田宮理事長はチャンスに転じたいと考えています。

▲ビルの完成イメージ

「お客さまに喜んでもらえる店舗に入ってもらうことによって、ビルの魅力が高まり、ひいては柳ケ瀬の魅力が高まります」

「以前、無料駐車場がないことが問題だという商店主がいました。一方で、近所の神社ではたくさんの参拝者が駐車料金を支払って御朱印を授かっています。魅力ある店舗ならば、駐車料金を支払っても行きたいと思われるはずです」

「柳ケ瀬の良さは商店主とお客さまとのつながりです。新しい店舗が増えても、つながりを大切にする文化は守っていきたい」

この再開発事業の目的は、高島屋南地区だけの活性化ではありません。ビルの分譲住宅に住む人や、ビルの商業施設・公益的施設に来訪する人を増やすことによって、柳ケ瀬ににぎわいを取り戻すことが最終的な目的です。

「心配しているのはこれからです。ビル完成後の２～３年は物珍しさでお客さまが増えるでしょうが、それでは永続的なにぎわいを作れません。周囲の街の人々にも応援してもらいながら、事業を進めていきたいです」

工事完成は２０２２年の予定です。

イベントをどう活用するか
みんなでてりゃあクラフトフェア

◆主催：多治見ながせ商店街振興組合

４月１３日、１４日の２日間、多治見市のながせ商店街が「第２６回　みんなでてりゃあクラフトフェアｉｎ多治見」を開催しました。毎春、「たじみ陶器まつり」にあわせて開催している、ながせ商店街の名物イベントです。今年もながせ通りに、陶器をはじめ、布小物や木工品、皮革製品など、手作り商品を扱うブースが並びました。

■クラフトフェアの過去と現在

クラフトフェアが多治見で始まったのは、約２０年前です。現在こそ手作り商品を扱うクラフトフェアは全国各地で開催されていますが、当時は珍しいイベントでした。東は埼玉県、西は兵庫県の方も出展され、５０～６０ものブースが並び、手作り商品を求めるお客さまも全国から集まりました。

クラフトフェア立ち上げの際には、多くの関係者に協力してもらったといいます。仮に今、同じイベントの立ち上げを企画しても、警察署から道路使用許可を取得するだけで大変なようです。このクラフトフェアは約２０年の積み重ねがあるおかげで、毎年円滑に許可を得ることができるそうです。

長年の積み重ねは、出展者の信頼も得ています。出展者の多くは運営の不備を警戒します。クラフトフェアはブースの設営にしろ、撤去にしろ、スムーズに進むため、苦情も少ないそうです。

今年のクラフトフェアには３０のブースが出展しました。その中には多治見工業高校専攻科のブースもありました。昨年までは、たじみ陶器まつり会場の本町オリベストリートに出展して

いましたが、今年は会場を変えての出展です。例年どおり、授業で制作した陶器を販売し、多くの来店客でにぎわっていました。「毎年楽しみにしているわよ」というお客さまもいました。

▲多治見工業高校のブース

このクラフトフェアでは、商店街の店舗が集客を図っている姿も目につきました。ある店舗では店頭におすすめ商品を並べ、来街者の足を止めていました。イベント開催について聞かれる言葉として「来街者は増えるが、来店者は増えない」というものがありますが、ながせ商店街の各店主はチャンスをつかむ努力をしているように感じました。

▲店舗による店頭での陳列

■クラフトフェアの課題と可能性

クラフトフェアの今後の課題について、多治見ながせ商店街振興組合の田原さんにお話を伺ったところ、「継続することがいちばん難しい」とおっしゃいました。かつて５０以上も並んだブースも、近年は３０ほどまで減少しています。長年続いているイベントであるため、新規の出展者が参加しづらい雰囲気もあるそうです。

「出展者が減少すれば、入ってくる出展料も減少します。現在、商店街振興組合も広告宣伝費として運営経費を支出していますが、無尽蔵というわけにはいきません。少なくとも経費と出展料とのバランスが取れる水準にする必要があります。出展者の声を聞きながら、変えるべきところは変えていきたいと考えます」

一方で、クラフトフェアは今後も伸びる余地があるともいいます。

「陶器まつりのお客さまは、昔は量産品の陶器を両手いっぱいに買って帰る人が多かった。今は『この世に一つだけの作品』を求めるお客さまが多く、気に入った商品には何千円も支払うことも珍しくありません。クラフトフェアはそういう作品と出会う場を提供しているのです」

クラフトフェアが直接、商店街振興に寄与した例も教えていただきました。クラフトフェアに出展した経験者がながせ商店街を気に入り、それぞれ店舗を開いたのです。イベントによって集客を図るという話はこれまで聞いたことがありましたが、出展者が商店街の一員になる話はなかなか聞きません。**他のイベントでも、出展を募るだけではなく、出展者を商店街に迎えることも考えられるかもしれません。**

【取材・記事　中小企業診断士　山田圭介】

■通常総会開催のお知らせ

第５１回通常総会
日　時：令和元年５月２７日(月)　１３：３０～
場　所:ＯＫＢふれあい会館　１４階　展望レセプションルーム(岐阜市薮田南５－１４－５３)

消費税の軽減税率対応のためのレジ・システム補助金【第3版】

中小企業庁

消費税の軽減税率制度開始とレジ補助金期限である

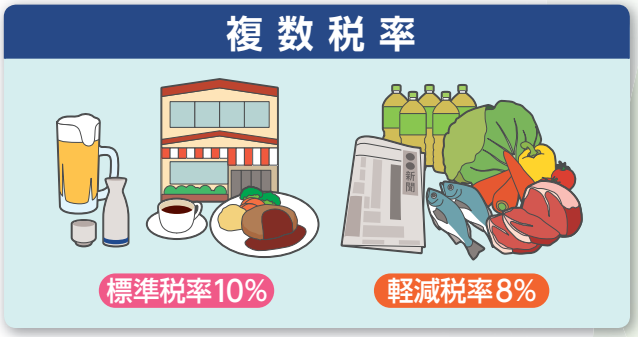
2019年10月が迫ってきました!!

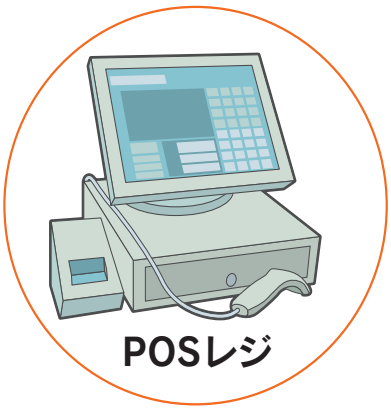
レジや受発注システムを導入・改修する方への国の補助制度があります。

お問合せは以下の番号(※)まで

0120-398-111（通話料無料）

※独立行政法人中小企業基盤整備機構が設置する軽減税率対策補助金事務局になります。





補助金の詳細は以下のURLをご覧ください。
http://kzt-hojo.jp/

QRコードはこちら!